

アメリカン・スナイパー

AMERICAN SNIPER

クリント・イーストウッド監督、ブラッドリー・クーパー主演の『アメリカン・スナイパー』——。クーパー扮するクリス・カイルは、狙撃手としての抜群の技術によって戦場の英雄となる。だが彼にはライフルを撃つ腕に隠された物語があった。

ネイビー・シールズ(米海軍特殊部隊)隊員のクリス・カイルがイラクに送り込まれたときの使命はただひとつ。味方の兵士たちを守ることだ。彼の極めて精度の高い射撃の腕により、戦場では無数の命が救われ、その武勇伝が知れ渡るにつれ、“伝説”という愛称まで付けられるようになる。だが彼の評判は敵陣にも伝わり、その首には賞金が懸けられ、反政府武装勢力の第一の標的となる。さらに彼は、祖国でも別の“闘い”を強いられていた。彼は遠く離れた戦地にいながらも、なんとかよき夫、よき父であろうと葛藤を続ける。

故郷では家族の問題を抱え、戦場では死と隣り合わせでも、クリスはイラクで緊迫した従軍を4回務め、“誰一人として残していかない”というシールズのモットーを自らの行動で示す。だが、妻タヤ(シエナ・ミラー)と子供たちのもとへ戻ると、クリスは自分が残していけないのは戦争そのものであることに気づくのだった。

『世界にひとつのプレイブック』と『アメリカン・ハッスル』でオスカーに2度ノミネートされたブラッドリー・クーパーが率いるキャストには、シエナ・ミラー、ルーク・グライムス、ジェイク・マクドーマン、コリー・ハードリクト、ケビン・ラーチ、ナビド・ネガーバン、キア・オドネルらが含まれる。

本作の監督はオスカー受賞のクリント・イーストウッド(『許されざる者』『ミリオンダラー・ベイビー』)。クリス・カイルがスコット・マクイーウェン、ジム・デフェリスとともに著した「ネイビー・シールズ最強の狙撃手」(原書房刊)に基づき、ジェイソン・ホールが脚本を執筆。その自伝は、発売とともにベストセラーとなり、「ニューヨーク・タイムズ」紙のベストセラー・リストに載った18週間のうち、13週は第1位を獲得した。

イーストウッド、ロバート・ロレンツ、アンドリュー・ラザー、ブラッドリー・クーパー、ピーター・モーガンが製作、ティム・ムーア、ジェイソン・ホール、シエラ・キム、ステイブン・ムニューチン、ブルース・バーマンが製作総指揮を務める。

クリエイティブ・チームとして、撮影をトム・スターン(『チェンジリング』でオスカー・ノミネート)、美術をジェイムズ・J・ムラカミ(『チェンジリング』でオスカー・ノミネート)とシャリーズ・カーデナス、編集をジョエル・コックス(『許されざる者』オスカー受賞)とゲイリー・D・ローチ、衣装をデボラ・ホッパーが担当。

ワーナー・ブラザーズ映画提供、ビレッジ・ロードショー・ピクチャーズ提携、マッド・チャンス制作、22ND & インディアナ制作。原題“American Sniper”。配給はワーナー・ブラザーズ映画(ワーナー・ブラザーズ・エンターテインメント・カンパニー)、一部地域でビレッジ・ロードショー・ピクチャーズ。

プロダクション・ノート

「……言っておきたい。記憶に残るのは自分が助けた命ではない。

助けられなかった命だ……。

永遠に目に焼きついているのは、そういう人々の顔とそのときの状況だ」

— クリス・カイル 「ネイビー・シールズ 最強の狙撃手」より

統計的な記録を考えなければ、クリス・カイルという人物は、戦地に送られたものすごい数の元兵士のひとりではなかったかもしれない。彼はイラクの戦場で、米国軍事史上最強の狙撃手として頭角を現したのだが、本作のフィルムメーカーたちは、その数字の背景の人物そのものを探ることが、少なくとも彼の業績と同等に重要だと知っていた。

本作で監督・製作を務めるクリント・イーストウッドはこう語る。「私はこれまでも戦争を扱った映画を作ったが、このストーリーは、クリスの戦闘上の功績と、彼の人生の個人的な側面がどう交わるかを描いているので、私はとても面白いと思ったし、個人的な面を掘り下げることで彼がより興味深い人物になった。戦争がひとりの人物に与えるダメージが明らかになるが、家族全体に与えるプレッシャーも描かれている。戦場へ送り込まれるときに、どれだけの危険があるのかを思い出し、そして、彼らが払う犠牲を再認識することは大切だ。だからこそ私は、このストーリーを語ることがとくに意味深いものだと思ったんだよ」

主演と製作総指揮を兼ねるブラッドリー・クーパーはこう付け加える。「ある意味で、これは従軍経験者のほとんどが乗り越えなければならない状況を描いた普遍的なストーリーなんだ。彼らは刻々と変化する緊迫した戦場にいたのに、帰国すると突然、“普通の日常”に引き戻される。僕はそこにとても心を動かされた。僕はこれが戦争映画というよりは、人物を検証している映画である点が気に入っている。それに『許されざる者』『硫黄島からの手紙』『グラン・トリノ』など、クリント・イーストウッドのこれまでの作品を考えてみれば、それぞれ背景はまったく違うけれど、すべて、複雑な人物検証の映画だ。だから、このストーリーをありのままに、忠実に描く監督として、彼はまさに適任だった」

クーパーはさらに、本作とその中心にある人間ドラマがイーストウッドの“基準”に合うとも考える。それは、暴力と正義が否応なく絡み合ってしまったときに影響を受ける人間性を掘り下げていくことだ。「クリスは暴力的な男でなかった。実際、暴力とはかけ離れていたが、命じられれば、彼は自分の任務に尻込みしたりはしなかった。その大義が正当だと信じていたからだ。彼のヒロイズムは単に戦場で彼が積み重ねた“射殺”の数で示されたのではない。彼の心だけでなく家族までもが、戦争から受けた目に見えない傷と、どのように最終的に向き合うことができたのかという点にあったんだ」

本作の脚本は、クリスが(スコット・マクイーウェン、ジム・デフェリスと)共著した「ネイビー・シールズ 最強の狙撃手」(原書房刊/原題は映画と同じ「American Sniper」)に基づく。だが、脚本を執筆し、製作総指揮も務めたジェイソン・ホールが、クリスのストーリーの映画化について彼に初

めて話をしたのは、本が完成する前だった。ホールはこう思い返す。「僕は、彼レベルの能力をもつ兵士のたどった道のりに興味があった……何が彼を戦地に駆り立てたのか、そのために彼は何を犠牲にしたのか。戦争が地獄のようなものだということを僕たちは知っているが、この映画では、戦争は人間くさいものであることを僕は示したかったんだ」

イーストウッドの長年の製作パートナーであるロバート・ロレンツはこう語る。「私たちはジェイソンの脚本がとても面白いと思った。じつにバランスが取れていたし、クリスのより完全な人物像、そして彼が戦場、祖国の両方でどんな苦難を体験したかが描かれていたからだ」

クリス・カイルという人物は、シンプルな行動基準に従って生きた。それは、神、国家、家族。それは彼にとって単なる言葉ではなかった。それは、自分自身より大きな意味をもつ何かに対する義務を果たし、任務を遂行し、そして揺るぎない献身を捧げた人生の基盤だった。ネイビー・シールズ隊員としての彼に対する要求のとてつもない大きさと、彼を深く愛した人々、とくに妻のタヤにのしかかった負担を考えると、最終的に彼はそれら3つの順番を検討し直さなければならなかったが、それらを守るという信念は決して変わらなかった。

イーストウッドはこう語る。「クリスは、その信念とともに育ったんだ。また彼は子供のころから、世の中には他者を守るために生まれてきた人々がいるという考え方を植えつけられ、自分もまさにそのひとりであると感じた。それが、家族を残していかねばならないというジレンマに苦しみながらも、彼が戦地へ戻り続けずにはいられなかった理由のひとつなんだよ。彼は、つねに求められている以上の責任を果たそうとするタイプの人間だったんだ」

クリスの評判は彼がまだ戦地にいるときに祖国で知れ渡り、脚本のホールだけでなく、まず、プロデューサーのピーター・モーガンとアンドリュー・ラザーの注意を引いた。モーガンはこう説明する。「私たちは、ネイビー・シールズ隊員としての彼の栄誉はあれこれ聞いており、彼がすばらしい愛国者であることは当然知っていたが、彼について詳しく調べていくうちに、彼がいかに純粋な意味でものすごい好人物であったか……家族、友人、そしてともに従軍した戦友たちからどれだけ愛され、尊敬されていたか、ということをしよつちゅう思い知らされることになった。だから私たちとしては、彼の人生の心情的なテーマ、彼を駆り立てたさまざまな事柄をめぐるストーリーを形作っていきかけたんだ」

脚本執筆にとりかかる前に、ホールはテキサスまでクリスに会いに行った。「最初、彼はあまりしゃべらなかった」とホールは思い返す。「でも僕は、帰るころまでには彼のストーリーをどう語ればいいのか分かってきていたし、彼の信頼も勝ち取った気がしていた。そして僕がドアから出て行こうとしたとき、彼は、『ああそうだ、じつは今、本を書いているんだよ』と言ったんだ。それを聞いたときは、その本が脚本を書くうえでの障壁になりそうな気がしたんだが、結局はすばらしい情報源になった」

アンドリュー・ラザーはこう語る。「のちにベストセラーになる本が誕生するずっと前から、私たちはこのストーリーを描くことを決めていた。だが、あの本のおかげで、クリスの視点が分かるという利点があり、それは当然ながら、私たちがこの映画を練るうえで、そして、全力で彼のストーリーを描くうえで、とてもいい情報源になった」

それでも、本には書かれていない部分で、ホールが直接見ることができ、脚本で描きたかったクリスの別の側面もあった。ホールはこう続ける。「これを戦地での彼を描くだけの映画にしたほうが簡単だっただろうが、クリスはそれだけではない、もっと複雑な人間だった。あの本が書かれたのは彼が帰国して1年足らずの時期だったので、彼はまだ心によろいをまとっていたんだ。あの本には、クリスのよりソフトな側面——愛情深い夫であり、父親——はあまり書かれていなかったし、4回の従軍の合い間の短い期間に、彼とタヤが必死に乗り越えようとした危機的状況のいくつかには触れていなかった。それに、あの戦争は遠く離れた場所で起こっているように思える一方で、多くの兵士たちの家族は、衛星電話を通してそれまでにないほど強く結ばれていたんだ。タヤは、そんな電話中に恐ろしい話を聞いたこともあったが、その電話は彼女にとって彼とつながる生命線だった。それに彼女の声を聞くことによって、彼のほうも故郷とつながり続けていられたんじゃないかな。僕はタヤと会うまでは、クリスのことを十分に理解できていなかったと思う」

「この映画は緊迫したアクション満載だ」とイーストウッドは言う。「だが映画の魂であり、ストーリーを展開させていくのは人間関係なんだ。クリスと戦友たちとの関係、そしてとくにクリスとタヤの関係はこの映画でいちばん重要だ。クリスがタヤに夢中なのは明らかだが、彼女に対する気持ちと同じくらいの強さで、彼は祖国から要求されている任務の遂行を誓っていた」

タヤ・カイルを演じたシエナ・ミラーはこう語る。「この映画の核にあるのは、ふたりの人物がかかり合う人間ドラマなの。そのひとりには、祖国から遠く離れた場所で想像を絶することをやっている。もうひとりには、家族をまとめようと頑張っている。クリスの責任感がものすごく強いのは、彼が本質的にそういう人だからなのよ。彼は、自分が家族とともに国にいれば、もっと多くの人々が死ぬことになると思っていて、それが彼にとってはとてつもなく大きな倫理的ジレンマになっている。タヤのほうも同じようにつらいんだけど、彼女はクリスの苦しさを理解し、辛抱強く夫を支えようとしている。でも、子供たちが絡んでくるとバランスをとるのがなかなか難しいし、内面ではもう崩れ始めているの。そういうふたりを描いているからこそ、ぜひ加わりたいと思えるような魅力的で感動的なストーリーになったんだし、タヤに会ってなおさら、私はしっかり演じなければという責任を感じたわ」

自分よりも体格のいいクリスを演じるために、徹底的な肉体改造を成し遂げたクーパーは、ミラーの意見に同感だが、こうも語る。「僕はクリスを演じる責任を重圧と感じたことは一度もなかったよ。名誉に感じただけだ。これは、クリス、そしてほかの兵士たちの祖国への献身に敬意を払えるとてもいい機会だと思えた。僕は彼を演じた一瞬一瞬がとても愛おしかったよ。どの瞬間も大いに楽しんだ」

2013年2月2日、想像もできなかった悲劇が、フィルムメーカーたちの責任感を誓いへと変えた。4回の従軍を生き延び、退役後の人生を、同じく戦地を経験した兵士たちを助けることに捧げたクリス・カイルは、テキサスの自宅からそう離れていない射撃練習場で殺害された。容疑者は、彼が手を差し伸べた元兵士だ。「あの時点で僕はクリスにまだ会っていなかった。電話で話したただだったんだ」とクーパーは言う。「そして、あんなふうに、彼は逝ってしまった」

葬儀のあとで、ホールはタヤに連絡をとり、ふたりは何時間も電話で話し、彼女はクリスとの人生について語った。「この映画が突如として、彼女の子供たちが父親を思い出す手段のひとつとなったため、彼女はきちんと描いてほしいと望んだんだ」とホールは言う。「クリスについて話すことは彼女にとって心の傷を癒す助けになっただけでなく、僕にとっても、彼女自身の言葉で彼女を描くことに役立った。彼女は戦地へ赴く前のクリスがどんな人物だったか、従軍によって彼が受けた暗黙のダメージ、そして回復するために彼に必要だったことすべてを鮮明に語ってくれた」

そのほぼ1年後、イーストウッドとクーパーはテキサスへ行き、タヤ、クリスの両親のウェインとデビー、そして彼の弟のジェフら、クリスの遺族と会った。イーストウッドはこう思い返す。「私にとって、彼らと過ごしたあの時間は極めて重要だった。クリスの人となりや彼自身の家族からよりはっきりと聞くことができたからだ。彼らは皆、すばらしい人々だったよ。彼らと会ったことで、ブラッドリーと私は、このすばらしい人物を失ったことへの悲しみと、この映画を作ることにさらに湧いてきた熱い思いが入り混じった気持ちになったものだ」

「僕らはこの映画をクリスの名に恥じないものにするのを彼の遺族に誓った」とクーパーは付け加える。「そして正直な話、撮影中に僕は彼の存在を感じた」

タヤ・カイルはその誓いは守られたと請け合い、こう語る。「私はまず(脚本の)ジェイソンを称えたいですね。彼は、クリスのさまざまな側面を深く探り、それを知るために、ほんとうに多くの時間を費やしてくれました。そして、クリント、ブラッドリーをはじめ、この映画にかかわったすべての人々が、ジェイソンのその努力をしっかりと受け止めてくれたこともすばらしかった。それだけでもうれしいのに、私が愛し、これからもずっと愛し続ける男性について、世の中の人々が少しでも知ってくれることになり、それが映画の中でずっと残っていく。この映画はある意味でクリスの分身です。兵士としてだけでなく、人間として、クリスという人物全体を正確に描いていて、私としてはこれ以上のものは望めません」

クーパーはこう語る。「映画の始めのほうでクリスは、『俺は国に命を捧げるつもりだ』と言うんだが、彼の本気が伝わってくる。そしてその後の彼が歩んだ道のり……。それによって彼は殉教者になったわけではない。彼はあくまでもひとりの人間でしかない。でも、それがクリスという男だったんだよ」

新兵募集と訓練

本作では、クリス・カイルの人格がどのように形成されていったかを垣間見ることができる。テキサスで過ごした少年時代に、彼と彼の弟に父親が最初に教えたのは、世の中の人間には3種類いるということだった。それは、“羊”と“狼”と“番犬”だ。それを聞いた瞬間、クリスの進む道は本人の自覚さえなしに定められた。それについて、ブラッドリー・クーパーはこう語る。「クリスは、他者を守ることに全力を尽くす人間になるべくして生まれたような男で、その使命感は彼の生涯を通

して感じられるんじゃないかな。多くの意味で、彼の保護本能と、そのために彼が払った犠牲を描いたのがこの映画なんだよ」

「彼は、弱者のために戦う意義を信じている、大柄で強い少年だった」とクリント・イーストウッドは付け加える。「それは狙撃手としての彼の役割にも通じるものだった。彼の役目は、地上の部隊のために目を光らせ、地上からは見えない敵から彼らを守ることだった」

クーパーは、クリスを演じることは、肉体的にも精神的にもかなりの試練になると分かっていたが、そのチャレンジを歓迎した。彼はこう語る。「クリスそのものになる以外にこの映画を作る方法はなかった。彼を模倣するのではなく、彼に完全になりきることが絶対条件だったんだ。僕は、彼の歩き方や話し方を見極め、自分がクリス・カイルだと信じられるようになるまで、まず体格的にも彼に近づける必要があった。僕自身が信じられなければ、ほかの誰も信じないからだ。僕は、彼を録画したあらゆる映像を何度も繰り返し観て、できる限りのリサーチをした」

クーパーは方言コーチのティム・モニックの指導を受け、カイルのテキサスっ子特有のゆったりしたしゃべり方を完璧に身につけるべく努力をした。体を大きくするには肉体的に大きな要求に応えなければならず、トレーナーのジェイソン・ウォルシュとともに、厳格なエクササイズ・スケジュールを守ると同時に、高カロリー食で体重増加に励んだ。「クリスは筋肉質で 105 キロぐらいあり、当時の僕は 84 キロぐらいだったので、3か月間、いつも食べては運動している感じだった。あれはキツかったな」とクーパーは認める。

「体質的にある方向へ自然に向かない場合、それを達成するには休みなしで頑張らないといけない。そしてブラッドリーはそれをやり遂げた」とイーストウッドは言う。「出番でないときに、彼がミルクセーキや栄養食などを手にしていないことはなかったんじゃないかな。撮影最終日には、『助かった、これでもう食べなくて済む』と言っていたよ」

フィルムメーカーたちの誰よりもクリス本人とじっくり時間を過ごした脚本・製作総指揮のジェイソン・ホールは、こう請け合う。「ブラッドリーが体を張ってクリスになりきろうとしたことは、クリス本人にとってとても大きな意味があったはずだ。でも声と体を変身させただけでなく、ブラッドリーはクリスのより内面性をも体現していた。僕はモニターで見ていたんだが、彼がある特定の形で立っていたり、何かを見ていたりすると……。とにかくその独特の雰囲気僕に鳥肌がたったものだ。『たまげた、あれはクリスだ』と僕は思ったんだよ。それほど不思議な感じだった」

クリスの妻タヤも同感だ。「この映画を観れば、実際のクリスの心、魂、そして人となりを分かってもらえるはずです。苦しみ、歓喜とともに生きたひとりの男の精神と心、そして彼が体験したあらゆることが伝わってきます。それはブラッドリーがそれをすべてつかんでくれたから」

イーストウッドはまた、クーパーがこの役に完全に没頭したことにも敬意を抱いた。「ブラッドリーの熱意とプロ意識は圧倒的だったよ。彼は全力でこの仕事に取り組み、この作品のあらゆる側面をどうすればベストの形に作り上げられるかについて、つねに考えていた」

じつは、クーパーとクリスはイーストウッドに対して同じように敬慕の念を抱いていた。「クリスは、自分の本を映画化するならクリント・イーストウッドに監督してほしいといつも言っていたそうだと

クーパーは明かす。「そして僕も前からずっと、クリントと仕事をしたかったので、彼が、『さあ、この映画と一緒に作ろう』と言ってくれたときは、ほんとうにうれしかったよ」

「クリスも私も、クリント・イーストウッドが監督してくれたら理想的だと思っていたのです」とタヤは言う。「でも、まったく現実的ではないことだと思い込んでいました。ところが、クリスが亡くなったあとでクリントが監督を承諾したと聞いて、私はなんだかすごく厳肅な気持ちになり、うなずきながら天を見上げて、『やったわね、クリス』と言ったのです。なかなか信じられなくて、『ありえないことじゃないけど、ほんとに？』と思わずにはいられない瞬間でした。クリス・カイルの映画の監督をクリント・イーストウッドが引き受けてくれるなんて、これ以上のことはありませんでした」

「僕は、クリントのテンポの速い撮影スタイル、効率のいい時間の使い方がものすごく好きだった」とクーパー。「それに彼は、僕をフィルムメイキングそのものに加わらせてくれて、僕自身にとっても、僕の演技にとっても、非常に有意義なレベルで僕にコラボレーションを許してくれた」

「クリントと組んだことは、私にとって、かつてないほどに創造的な解放感を覚える経験だった」とタヤ・カイル役のシエラ・ミラーは語る。「彼は俳優をとて信頼し、とても直観的で、自分が必要とするものを得たかどうかを見極める力に自信をもっているの。だから、俳優として否応なしに自由を手に入れる感じ。この世にクリント・イーストウッドほどクールな人はいないわ。それは断言できる」

クリス・カイルの最愛の女性タヤとして、ミラーは彼らが分かち合った情熱だけでなく、ネイビー・シールズ隊員の妻としてタヤが直面する心情的な試練も表現したいと思った。また、タヤのユニークな気性を表現することも絶対に必要だった。「彼女は気骨のある女性なのよ」とミラーは説明する。「タヤは自分が何を望んでいるかをちゃんと分かっている。彼女は愚かな行為に対して容赦しない。彼女は頭が切れる。それは、彼女が映画で初めて登場する、クリスと出会うバーのシーンで見るとれると思う。ふたりはすぐに意気投合するけれど、タヤは彼の職業に関して不安を抱いているの。でも、クリスには彼女の不安を取り除くような雰囲気があり、とても誠実そうなので、彼女の先入観はあっさり消えていくのよ。あのとき彼女は、人生をともにする相手と出会ったことに気づいたんだと思う」

製作のロバート・ロレンツはこう断言する。「タヤの役には、それに飛び込むことができ、クリス・カイルという伝説的な人物に臆することなく自分らしさを保ってられる俳優が絶対に必要だった。実際のタヤは個性がとても強いので、クリスとバランスをうまくとることができた女性なんだ。そして、シエナは映画の中で同じ役割を果たしている。ブラッドリーの演技に対して、彼女自身もすばらしく感動的な演技でバランスを保っているんだ」

「タヤは、エネルギーでも強さでもクリスに引けをとらない」とクーパーは付け加える。「だからこそ、彼らの関係には情熱と愛だけでなく、苦しみもたくさんある」

ミラーはこう語る。「タヤはクリスとの人生を始めるにあたって、彼が神、国家、家族を、その順番で生きる規範にしていることを知っているの。彼女は、そんな彼の生き方を忍耐強く、そして理解するように精いっぱい頑張る。でも、それについてはタヤとも話したんだけど、妻として優先順位の3番目というのは実際、つらいものよ」

ミラーは、自分が演じている女性から直接、その役に関するとても多くの情報を得ることができたと付け加える。「私が初めてタヤと会ったのはスカイプ越しで、電話でも何度も話したわ。その後、撮影開始前に彼女がロサンゼルスへやってきて、私たちはおしゃべりをし、ハグをし、笑い合い、泣き合ったりしながら一日をともに過ごしたの。あれはすばらしい経験だった。彼女はほんとうに強い女性で、私は彼女の立ち直る力がとにかくすごいと思う。それに、クリスと生きた年月の間、彼女がどんなふう感じていたのかを私がしっかり理解できるように助けてくれた彼女の寛大さや協力してくれたことにとても感謝しているの」

タヤはこう思い返す。「私がパソコンに保存してあったクリスの映像と写真をシエナに見せていたときのこと。彼女が突然、私を見て、『すごい、あなたは彼のことをほんとうに愛していたのね』と言ったのですが、そのときの彼女の言い方が特別な感じがしたのです。だって、彼女とはそれ以前にも話をしていて、彼女は私が彼を愛していることを知っていたですから。でも、あの瞬間に、これこそが人生を変えた愛であり、私が二度とそんな経験はしないであろうことを彼女は理解できたのだと思います。それをほんとうの意味で理解できた以上、彼女はそれをきっと演技に反映させるだろうと私は思いました。そして彼女はやり遂げたのです」

イラクで4回従軍する間、夫が危険な場所にいるという事実能耐えたこの女性からの情報が役立つのはミラーだけではなかったとクーパーは言う。「タヤはこの映画全体にとって、とてつもなく大きな財産だった。彼女は僕とシエナに、彼らの人生の多くを明らかにしてくれたんだ。メールのやりとりをいろいろ読ませてくれたり、ある特定の状況を説明してくれたり。彼女が寛大にも、ふたりの関係のとても私的な部分を教えてくれたおかげで、僕たちは、ともに生きたことが彼らにとってどんなものだったのかをよく理解することができた」

「ブラッドリーは、私がとてもオープンで、私たち夫婦について詳しく話したことに感謝していると何度も私に言っていましたけど、実際はその逆だと思っています」とタヤは語る。「私のほうこそ、彼らがあればだけ詳しく知りたがるほど、私たちのことを気にかけてくれたことを感謝しているのですから」

タヤと子供たち以外でクリスが家族同然の深い絆を結んでいたのは、ネイビー・シールズのチーム3の戦友たちだった。製作のアンドリュー・ラザーはそれを“真の兄弟愛”と呼ぶ。「シール・チームというのは、米軍の中でも極めて危険な任務を命じられる。毎日が生きるか死ぬかという状況なので、彼らの絆は非常に強くなる。生き抜くためには、それが必要なんだよ」

脚本のジェイソン・ホールはこう付け加える。「なぜ従軍するのか、なぜ何度も進んで戦地へ戻っていくのかと彼らに聞けば、どの隊員でも、祖国のために戦うのだと答える。それは真実だ。だが、もっと根本を探ると、彼らはこう言うはずだ。『俺は自分の隣にいる仲間のために戦っていた』と」

シールズのチーム3で実際にクリス・カイルとともに戦った兵士のひとりが、戦友たちからは“ドーパー”の愛称で呼ばれていたケビン・ラーチだ。クリスの親しい仲間として、ラーチは本作の制作においても重要な情報源となった。彼は、スタッフ、キャストに実際の軍事展開について撮影に絶

対必要な情報を提供し、やがて海軍技術顧問として本作に加わることになった。だが、彼はまもなく別の役割も担うことになった。自身の役での出演である。

ラーチはこう思い返す。「あのとき僕は、ブラッドリーに長距離の狙撃を教えていたんだが、彼が、『この映画で自分自身を演じることを考えたことはある？』と聞いてきた。僕は自分が演技ができるかどうか分からなかったけれど、プレゼン用にビデオを編集してみた。そしてクリントがそれを観て気に入り、出演することになったんだ」

撮影現場では、イラクにおけるシールズのチーム3の配備を直接知っているラーチの存在はかけがえのないものとなった。クーパーはこう語る。「彼は、クリスのちょっとした逸話や、彼ならこうした、ということを知ってくれたんだ。それに彼は、実際のチームが機能するであろう特定の方法で僕らを引っ張ってくれて、それによってどう撮影するかが決まったシーンもあった。彼なしでこの映画を作っていたかもしれないなんて、今では想像もできないよ」

ラーチにとって、撮影現場に足を踏み入れることは時間を遡ることでもあった。「海軍を除隊して数年たっていたが、いったん戦闘服を着ると、イラクに戻った気分になったことも何度かあったな。この映画のセット・デザインが見事だったので、視覚的には現地にいたのと同じだったため、あとは、頭の中をシール・チームの一員に戻せるかどうかだった。あのときの状況を再現すると、まったく同じではないものの、あの感情、あの理屈抜きの気持ちが湧いてきたよ。それは僕にとって強烈なものだったし、セットで見守っていた誰にとっても強烈だったはずだ。毎日、そのことを思い起こさずにはいられなくなる」

さて、シールズのチーム3のほかの隊員たちを演じる俳優として、イーストウッドが起用したのは若手のアンサンブル・キャストである。そのひとり、ジェイク・マクドーマンが演じるライアン・ジョーブは、ネイビー・シールズの訓練初日に、“ビッグルス”というあまりありがたくない愛称を頂戴してしまった。その理由は、「平均的なシールズ隊員候補生よりもちょっとばかり体が重かったから」だとマクドーマンは言う(原作での説明によれば、「ビッグルス／Biggles」→「大きい」の“ビッグ／big”と、「へらへら笑う」の“ギグルス／giggles”を組み合わせたもの)。「本人にとってはあまりうれしくない愛称でも、いったん付けられるともう取り消せない。決まりだ」

ビッグルスとクリスは、シールズの過酷な訓練中に親友になる。そのときのクリスの行動は彼がもって生まれた保護本能を象徴するものだ。マクドーマンはこう説明する。「ビッグルスが訓練で苦戦していることにクリスが気づき、彼は自分のほうにみんなの注意を向けることによって、ビッグルスのプレッシャーを軽くしようとするんだ。そのサポートによってビッグルスにチャンスがひらけて、彼は苦境を乗り越え、やり遂げる。そのときにできた絆は、ともに従軍していた間じゅう続くんだ。シールズの誓いどおり、どんなに厳しい状況になろうとも、仲間を誰ひとりとして見捨てはしないということだよ」

彼らの仲間にはほかに、コリー・ハードリクト扮する“D”、ルーク・グライムス扮するマーク・リー、エリック・レイデン扮する“リス”、レイ・ギャリエゴス扮するトニーらがいる。

実際のシールズ候補生が耐えるものとは比べものにならないとはいえ、イーストウッドが起用した俳優たちは、海軍の精鋭特殊部隊の隊員にふさわしい演技をするために、一種のブート・キャ

ンプ(新兵訓練)を体験した。彼らをケビン・ラーチとともに鍛えたのは、本作の軍事顧問で元海兵隊員のジェームズ・D・ディーバーである。彼は、『父親たちの星条旗』『硫黄島からの手紙』でもイーストウッドと組んだ。

「僕らは、銃の正しい構え方、ある場所へどう突入して、どう状況を確認するのか、また、正しい言葉遣いなどを覚えなければならなかった」とグライムスは語る。「僕らが始終、思い出させられたのは、撮影のためにやっているのではないということだった。そこにいた仲間たち、そしてその瞬間もそこにいる仲間たちのためにやっているのだということをしっかり頭に叩き込まれ、僕らはそれをとても真剣に受け止めたよ」

ハードリクトはこう付け加える。「僕らはとにかく集中力を切らさず、ベストを尽くそうとした。僕らは結局のところ、演じていただけなわけだからね。実際の兵士たちにとっては、あれが現実だった。あの装備を身につけて戦場へ出たら、まさに真剣勝負だったんだ。だから、僕らはそんな彼らをきちんと演じたかった」

「どの俳優も、このストーリーを語るために全力を尽くした」とイーストウッドは言う。「彼らの献身、そして、毎日実際に戦った人々に対する深い感謝の気持ちが私にはとてもありがたかった。どんな条件であろうと、彼らはひとつも文句を言わず、とにかくきっちり役割を果たすことに専念してくれたよ」

ブラッドリー・クーパーは、ネイビー・シールズの狙撃手として説得力をもたせるために、特別な準備が必要だったが、それは単に銃を発射できるようになることではなかった。それについてクーパーはこう説明する。「僕は、.338 ラプア(.338 ラプア・マグナム弾用の銃)、.300 ウィンマグ(.300 ウィンチェスター・マグナム弾用の銃)、Mk11 という、クリスが実際に使った狙撃用ライフル3丁で訓練をした。そういう武器の扱いに慣れることは不可欠だったからね。でも、クリスになりきるにはほかにも習得することがあった。それは、ものすごくプレッシャーがかかる状況であっても、極めて整然とした形で任務を果たす能力だよ。狙撃手たちが習得しなければならないことはじつに興味深いんだ。うつ伏せの体勢での銃の構え方とか、両足のある特定の位置に置かなければいけないこととか、呼吸さえもコントロールしなければならないこととか。そのうえ、彼らは長時間、銃を構えたままの姿勢でいなければならない。ケビン・ラーチと僕は、クリスが動かずに8時間も銃を構えたままでいられたことを話し合ったんだけど、それって驚異的な能力だよ」

「ブラッドリーは、クリスを演じるうえで細部までとことんこだわり、徹底的に調べ尽くした」とラーチは賞賛する。「彼はまるでスポンジのように、あらゆることを素早く覚えていったよ。もともとの意欲が高いので、彼は、実際のシール・チーム以外で僕がこれまでに組んだ誰もレベルが違っていたよ。クリスを演じるにはまさに適任だった」

本作では、クリス・カイルの伝説的な名狙撃手に対抗したのが、サミー・シーク扮する敵の狙撃手ムスタファである。「彼はシリア人狙撃手で、オリンピックでは祖国のために競った」とシークは言う。「その彼がイラクに来たのは、共通する敵をもつ反政府武装勢力とともに戦うためだった。彼は映画の中でひと言も発しないんだが、僕はとても興味深いキャラクターだと思った。言葉を発し

なくても、彼の動きにはすべてリズムがあったんだ。クリントはよく、『ゆっくりやれ。この男はストレスにさらされていてもクールなんだ』と僕に言っていた」

製作のピーター・モーガンはこう説明する。「イラク人はクリスを“ラマディの悪魔”(ラマディはイラク西部の都市で激戦地)と呼び、彼の首に賞金を懸け、ムスタファは彼を追っている。ムスタファは地上の米軍部隊にとっても大きな脅威なので、彼を仕留めることはクリスにとって個人的な意味をもつ重要な使命のひとつとなるんだ。ふたりの射撃の名手の対決を演出するには、映画史上でクリント・イーストウッドほどの適任者はいないだろう？」とモーガンはにっこりする。

クリスの使命感に拍車をかけるのは、地上の海兵隊の中に彼自身の弟ジェフがいることだ。「ジェフは兄と同じ道を歩くために軍隊に入った」と、演じたキーア・オドネルは言う。「ジェフは多くの理由でクリスを崇拝しているんだ。なによりもまず、子供のころから、クリスがいつも彼の味方をしてくれたからだ。それに、彼の家族はアメリカらしさが色濃い南部のテキサス出身ということもあり、兄弟で祖国のために戦っているというのはとても英雄的だよ」

クリスの家族として、両親のウェインとデビーを演じたのはベン・リードとエリース・ロバートソン。コール・コニスとルーク・サンシャインが、クリスとジェフの少年時代をそれぞれ演じている。また、ナビド・ネガーバンがアル＝オボーディ師(長老／シャイフ)役で出演しているほか、ミド・ハマダ演じる冷酷なイラク人は、いかに“虐殺者”と呼ばれるようになったのかを実証してみせる。

戦地派遣と帰郷

本作の撮影は、戦争で荒廃したイラクの代役を務めたモロッコの首都ラバトのロケで始まった。クリント・イーストウッドはこう説明する。「モロッコの建築物はイラクにとってもよく似ているんだ。ある様式を捉えるためのセットならどこにでも建てることができるが、町全体、都市全体の雰囲気を作り出すワイド・ショットだとセットでは再現が難しい。だから、モロッコは代役としてピッタリだった」

アメリカとは地球を半周した場所で撮影を始めたことは、二重の意味で本作の役に立った。モロッコは理想的な風景を提供したのに加え、「シールズのチーム3の隊員である俳優たちの絆を強めた」とクーパーは語る。「アメリカで撮影して毎晩自宅に帰るよりも、一緒に過ごす時間がずっと多かったからだ。それに、あれだけなじみのない土地にいて、祖国から遠く離れた国にいるのがどんな感じかを想像しやすかった。だから僕たちは、ラバトに滞在することから多くの収穫を得たんだ」

また、キャストもフィルムメーカーたちも、地元の関係当局や人々の大きな協力を得ることができた。町のある一角を完全に撮影用に使わせてくれたし、モロッコ軍の兵士たちは、いくつかのシーンでエキストラも務めてくれたのだ。

モロッコでの撮影が終わると、一行はカリフォルニアに戻り、残りの撮影をおこなった。本作の美術を担当したのは、長年イーストウッドと組んでいるジェイムズ・J・ムラカミと、本作が初のイーストウッド組であるシャリーズ・カーデナスである。彼らは役割を分担して本作の美術に取り組んだ。カ

ーデナスは軍事シークエンスに専念し、ムラカミはアメリカ国内のシークエンスを仕切ったのである。

カーデナスはこう語る。「私は、イラクに関して、とくにラマディ、ファルージャ、サドルシティを重点的に、かなりのリサーチをしたの。また、従軍に関するクリス・カイル自身の描写も参考にしたわ。私たちのモロッコのロケハン・チームも、クリスがイラクで過ごした年月を適切に再現するうえで、重要な役割を果たしてくれた」

撮影隊一行が“占拠”したのは、カリフォルニア州サンタクラリタのブルークラウド・ムービー・ランチ(映画・TVなどの撮影に使うための大牧場風の広大な場所)。そこに美術班は、モロッコのロケ地をそっくり模した、イラクの都市部の風景を再現した。クリス・カイルがラマディで過ごした従軍期間のほとんどは、このランチで撮影された。

本作の山場である戦闘シークエンスのひとつは、エル・セントロで撮影された。それは、サンディエゴの東約 160 キロメートルの乾燥地帯インペリアルバレーにある砂漠の町である。美術班はそこで、古い乳製品工場を、放置された年代物の工場に変身させた。クリスと彼のチームはそこで2つの強敵から脅かされる。まず、四方八方から彼らがいる位置に向かってくる圧倒的な数のイラク反政府武装勢力。そして、今にも彼らを覆い尽くしそうな大砂嵐だ。その砂嵐は、マイケル・オーウェンズ率いる視覚効果チームによる視覚効果と特殊効果を組み合わせて創り出され、セットと敵の兵士の数も増強された。

さて、イーストウッドと撮影監督のトム・スターンは、観客にアクションの臨場感を味わってもらうために、最新式のブラックマジック・カメラを採用した。手持ち型と固定型の両方を駆使し、セット全体に戦略的に配置されたこのデジタル・フィルム・カメラによって、彼らは戦闘の真ん中にある特別な感覚を創り出すことができた。

脚本・製作総指揮のジェイソン・ホールはこう語る。「クリントには、どのフレームでも本物をとらえる、生まれもった能力があり、自分がそれを見つけたのと同じ形で観客にもそれを見つけさせる。彼はこの映画にある種の気骨をもたらし、口に砂が入ったような、ざらざらした感情を抱かせるんだ。だから本物だと感じられるのであり、観客から無理に何かの感情を引き出そうとしたり、観客を操ろうとしている感じはまったくない。彼はどんな感情が湧き起こるにせよ、それを自然に任せ、そのうえで観客をこの映画の旅に導いている」

クリス・カイルとネイビー・シールズ候補生たちの訓練地には、異なる2か所が選ばれた。サンタモニカ山脈にあるパラマウント・ランチは、クリスとその精度の高い射撃の腕を見せる狙撃訓練場の背景を提供した。そして、カリフォルニア州コロナドにあるシールズの悪名高いシールズ基礎訓練(BUD/S)センターの代役を務めたのは、ロサンゼルス郊外のマリブにあるリオ・カリロ州立ビーチである。そこで候補生の根性が極めて過酷な訓練で試され、精鋭の中でもとびきり能力が高い者だけが、ネイビー・シールズ隊員である証^{あかし}のトライデント(エンブレム)を付けることができるのだ。

俳優たちは、実際の候補生たちが耐えなければならないもっとも厳しい訓練は免除されたものの、肉体的な試練を受けるのは避けようがなかった。ブラッドリー・クーパーはこう思い返す。「水

をかけられながら、バイクキック(仰向けで両脚を宙に浮かせ、自転車をこぐように動かす運動)をやっていたときはキツかったね。とくに、クリントは短くカットせずにカメラを回し続けることがあるから。今でも覚えているけど、僕はドーバー(本人役で出ているケビン・ラーチ)のほうを見ながら、『ドーバーがやめたら、僕もやめられるんだけど』なんて考えていた。でも、彼がやめるまではやめるつもりはなかったよ」と彼は笑う。

ジェイムズ・J・ムラカミは、クリスとタヤが生活をともにした家のデザインに主に取り組んだ。若い夫婦が暮らし、クリスの長期従軍中はタヤが守っていたサンディエゴの家として使われたのは、同じカリフォルニア州のベニスにある質素な家だ。

ついに退役を決めたクリスは、自分のルーツであるテキサスへ戻り、家族とともにミッドロージアンに移り住んだ。彼らのテキサスの家としては、カリフォルニア州ノースリッジにある家が選ばれた。身近な雰囲気を保ちつつも、テキサスの開放感とスケールを反映していたからだ。アート・ディレクターのハリー・オットーはこう語る。「クリスは民間人としての新しい人生に慣れ始めているわけなので、ジェイムズは、その心地よさと安心感を反映した家にしたかったんだ」

本作の衣装のデザインについて、デボラ・ホッパーはこう語る。「私たちは徹底的なリサーチをおこない、ふたりの人生全般にわたって、クリスとタヤの写真もたくさん見ることができたの。彼ら固有のスタイルからできるだけ離れないことが重要だったのよ」

軍服、とくにネイビー・シールズの戦闘服にも、個々の好みが反映された要素があった。ホッパーの衣装班は、軍事顧問たちに相談し、軍服の細部まで正確に再現して信ぴょう性を追求した。それでも、ホッパーはこう指摘する。「シールズ隊員は、軍服の着方にもそれぞれの個性をはっきり出しているの」

マイケル・パネビクス率いる武具班が受け持ったのは、正しい武器を使用することと、全編を通じた整合性に注意することだった。「クリスはイラクに派遣されるたびに、異なる武器を持っていたんだが、撮影は時系列ではないので、シーンごとにどの派遣だったかを確認しつつ、ライフルやピストルをしょっちゅう取り替えていた」とパネビクスは説明する。

休暇中の生活では、「クリスは“ファッション・リーダー”というわけではなかったわね」とホッパーはにっこり笑う。「彼のスタイルはリラックスしたカジュアル・ルック。私服のほとんどはジーンズとTシャツ、あるいはトレーナーで、それにたくさんある野球帽をかぶるスタイルだったの。退役後にテキサスに戻ったあとは、クリスの格好には、その生い立ちにもつながるカウボーイ・スタイルが反映されていたわ。このストーリーのどの側面においても、実際の人々に誠実であることが大事だった」

「この映画にかかわった人々みんなが、要求されている以上のことをやり遂げてくれたことに私はとても感謝しています」とタヤ・カイルは言う。「そこまでやる必要がないレベルまで、彼らは頑張ってくれたと感じていますし、それは、つねに自分の責任以上のことをやろうとしたひとりの人物を描くのにはふさわしいと思います」

クリス・カイルの祖国への献身は、軍服を脱いでも終わらなかった。ブラッドリー・クーパーはこう語る。「戦地から帰還した兵士の多くと同じように、国に留まっているのはクリスにとってつらいことだった。やる気も能力もあるのに、彼は戦地でいまだに危険にさらされている仲間を守ることができなかったからだ。彼がようやく自分の居場所を見つけたのは、ほかの帰還兵たちの手助けをする方法を探し始めてからだった」

「彼がイラクでおこなったことはすべて、とても英雄的な行為だった」とジェイソン・ホールは言う。「だが、帰国後におこなったことも同じように英雄的だったんだ。僕たちがきちんと認識しなければならないのは、彼ら兵士たちは自分で軍への入隊を選んだけれど、どんな戦争をするかを選ぶわけではないということだ。彼らは戦地に足を踏み入れた瞬間から、使命を担い、僕たちのために自分のすべてを危険にさらす。彼らが目撃し、おこなうことは、その場にはいない僕らにとっては理解することさえ難しいが、彼らにそれをやってもらっている以上、帰還した彼らを心から、暖かく歓迎できるような心構えをしておくのが僕らの責任なんだよ」

タヤはこう語る。「私はこういう話を聞いたことがあります。帰還兵に手を差し伸べると、彼らは両手でしがみつこうとはしない。彼らは片方の手でその手をつかむと、もう一方の手を自分の後ろにいる兵を引っ張り上げるために使うと。ほんとうにそのとおりなのです。私は、クリスの人生を称えて、あるいは、この映画や原作から何かを学んだために、人々が何をするかをとても楽しみにしています。助けを必要としている多くの人々のために、多くのよいことをおこなう機会には誰にでもあるのです。結局のところ、自分がほかの人々にポジティブな意味で影響を与えたと知るほど、すばらしい人生はないのではないのでしょうか。そして、それがクリスの人生だったのです。私は、この映画が彼にとって祖国に貢献できるもうひとつの手段のような気がしています」

イーストウッドはこう締めくくる。「クリスは何をするにしてもつねに、さらにひとつ多くのことをやっていた。そしてそれは、帰還兵たちのために彼が始めた仕事でも同じだった。最終的には、それが悲劇につながってしまったわけだが、彼が重要な人物であることや、このストーリーが重要であることはそのせいではない。私たち全員が願うのは、彼のストーリーを知ることによって、兵士たちと彼らの家族がどれだけ犠牲を払っているかということを人々が思い出し、祖国のためにあまりにも多くを捧げてきた人々に対して、今以上に感謝するようになればいいということだ」